

周縁を見る、周縁から見る：*Jane Eyre* と *Villette* における地理、階級、ジェンダー

石井明日香

Patricia Ingham が指摘するように (161)、階級の問題について “I cannot write books handling the topics of the day” (75) と言っていた Charlotte Brontë であるが、彼女の四つの小説すべてで、階級の問題とその微妙さが描かれている。確かに階級の対立と和解は小説の主要なテーマではなかったからかもしれない。しかし Ingham の指摘通り (116)、ロンドンから遠く離れた地に住んでいた、いわば地理的周縁にいた Brontë だが、問題の複雑さ、微妙さをよく理解していた。女性で *governess* であった Brontë は、階級、ジェンダーの上でも彼女のヒロイン同様周縁にいたと言える。つまり、作品中での周縁性をめぐる問題とは、周縁から周縁への視点でもあるのだ。本稿では、Brontë の *Jane Eyre* (1847) および *Villette* (1853) を中心に、階級、ジェンダー、および地理的 *marginality* の問題がどのように描かれ、解決され、あるいは未解決のまま終わっているかを考察する。また、*Jane Eyre* の映像化作品においても周縁性の問題はそれぞれ異なる形で描かれている。主に二つの作品を取り上げて、この問題を考察したい。実は映画と原作との違いに周縁性の問題がかかわっていてもいるのである。

地理、階級、ジェンダーにおける周縁性という問題は互いに関連している。そして Brontë の現実認識が表れている問題点でもある。つまり、特に *Villette* において顕著であり、そして今回詳しく述べる余裕はないが、宗教的周縁性の問題と同様に内面の問題であるのと同時に客観的、言い換えれば社会的な問題としても描かれている。Brontë の主人公が個人的な問題と

して認識していたのは、実際には社会問題でもあったのであるが、Virginia Woolf が “When Charlotte wrote she said with eloquence and passion ‘I love’, ‘I hate’, ‘I suffer’. Her experience, though more intense, is on a level with her own.” (168–69) と述べているように、主人公にとっての問題認識はあくまで個人的なものであり、自分にとっての困難としてであった。厳密に言えば、*Jane Eyre* の年代は Brontë が執筆した時代より少し前である可能性があるのだが、Jane や Lucy Snowe が直面したのが十九世紀イングランドの中産階級の女性が直面した問題であることは間違いないであろう。(*Jane Eyre* の時代設定は、作品中で言及される Walter Scott の *Marmion* の出版年をどう考えるかで主に二つの考え方が可能であるのだが、どちらにしても十九世紀の前半には物語は完結しているはずである。Sutherland pp. 68–80 参照)。二つの作品で周縁性をめぐる問題はどのように描かれ、認識されているのだろうか。

最初に *Jane Eyre* からであるが、Gayatri Spivak は、*Jane Eyre* が、家族の輪から疎外された Jane が、最後には自分を中心にした合法的な家族を獲得する物語だと書いている。つまり Gateshead で家族の団らんから排除され、居間に隣接する朝食室の窓際でカーテンを引いて座り、“I was shrined in double retirement” (14) と話す Jane が (これが “a scene of the marginalization and privatization” [Spivak 119] である) Lowood での疑似家族、Thornfield での非合法的な家族を経て、最後には Rochester とその間に生まれた子どもという合法的な家族を得て、自分がその中心にいるという結末であると説明されている (Spivak 120)。同じことが家族以外のテーマに関しても言えるのではないか。言い換えれば、階級的にも地理的にも周縁にいた Jane が最後には中心性を獲得する物語であるということである。

まず、地理的な問題であるが、これは植民地対本国という形では Jane の意識の表面に表れているとは言えないが、他のヨーロッパの国に対するイングランドの優位性という形でしばしば言及される。さらに植民地と本国との関係は、階級およびジェンダーの問題を考える上で大切なことである

ので、最初に考察したい。

Simon Gikandi によれば、植民地は政治的周縁を示すものであった。この文脈で Jane が St. John Rivers からの求婚およびインド同行を拒否したことを考えると、Jane は地理的、そして政治的に周縁に行くことを拒否したことになる。最終的にはイングランドにとどまった Jane であるが、Edward Rochester との結婚生活の、少なくとも最初の段階は、人里離れた森の奥深くの Ferndean での生活であった。つまり地理的周縁性を示唆しているが、どれほど都会から離れた場所であっても、イングランドにいる限り、Jane は地理的には中心に在ると言ってよい。少なくとも Jane はそう思っていることは、例えば田舎の村である Morton を “the healthy heart of England” (402) と呼んでいること、そして、“after all, the British peasantry are the best taught, best mannered, most self-respecting of any in Europe: since those days I have seen paysannes and Bäuerinnen; and the best of them seemed to me ignorant, coarse, and besotted, compared with my Morton girls.” (434) と言っていることなどでも明らかである。そして *Villette* でも繰り返されるフランス対イギリスというテーマは *Jane Eyre* にも何度も表れ、Jane はそのたびにイングランドの優位性を主張している。特に教え子である Adèle の欠点はフランス人の母親のせいになされ、最後には “a sound English education corrected in a great measure her French defects” (499–500) と言われている。

そしてどれほどロンドンやその他の都会から離れていても、イングランドにいる限り周縁ではないように見えるのは、一つには後述するように St. John がインドに行って、Jane は実際には行くことはなく、また上で見たように Jane の意識の中に他のヨーロッパの国々に対する優位性が確実なものであるからだろう。インド行きをためらい、最終的に断った主な理由は、植民地に対する無知や無理解からくる不安以上に、St. John との結婚に対するためらい、つまり男性との力関係であろう。そもそもインドについての Jane の認識は、判断材料になるほど深くはないようだ。つまり、Madeira について “An island thousands miles off, where they make wine”

(107) という程度の具体的な描写しかないように、インドについても具体的な記述はほとんどない。インドについての認識と言えば、暑い場所である、つまり “You [Jane] are too much pretty, as well as too good, to be grilled alive in Calcutta” (462) という程度のものである。イングランドの優位性を繰り返し強調する Jane にとって、海を渡ってイングランドを離れることが、たとえばそれがアイルランドであっても周縁に行くことであったかもしれないが、(実際に Jane は Rochester にアイルランドでの仕事を紹介されたときに “the sea is a barrier . . . from England” [282] と答えているのであるが) 最終的に植民地に行った St. John との対照によりイングランドに残った Jane の優位性、中心性が示される。いずれにせよ、地理的周縁性は、植民地対本国という形で前景化される問題ではないし、Jane の意識にはない問題であると言える。Elizabeth Helsinger は Emily Brontë の *Wuthering Heights* (1847) がイングランド本国での地理的、階級的周縁を描いた小説であると言っているが、このことは *Jane Eyre* についても言えるのである。

そして地理的周縁の問題は、他の問題、つまり階級およびジェンダーの問題と関わっている。先ほど見たように、小説の結末では Jane は Rochester とともに森の奥深くに住んでいて、わずかな例外として、ロンドンに Rochester の目の治療のために行ったこと (438)、そして Diana と Mary の Rivers 姉妹と定期的に訪ね合うこと、さらに上で引用したようにヨーロッパ大陸にも行ったということが語られる (501)。おじの遺産を得ている Jane は、経済的には自立して、言い換えれば Rochester と対等に近い関係であると言える。Jane は階級的周縁を示唆する *governess* ではなく、働かない既婚女性といういわば中産階級の中心的地位を占めているように見える。しかしながら、植民地の影は最後まで消えることはない。周縁性は Jane の周りから消えても作品中から消えるわけではないのである。また、経済的には男性と対等、あるいは自立したとしても、森の奥深くでの生活で介護以外のことが何もできない生活が、男性に対して精神的に対等、あるいは自立した生活と言えるであろうか。

周縁的なものとは、「中心的つまり支配的なものの外にあるもの」(Childers and Hentzi 252)であるとすれば、ジェンダーの上で、言い換えれば男女の関係において女性であることは周縁であると言える。Janeにとっても男性と対等の、特に精神的、経済的に対等であることは常に大切な問題であった。つまり経済的自立は男性との対等な関係のために必要なことであった。これに比べれば地理的、階級的な問題は問題意識として前景化されることはなかったかもしれない。Brontëが自分で「今日的なテーマは扱えない」と言ったのは、そういうことであろう。

それでは *Jane Eyre* において階級の問題は最終的にどう描かれているだろうか。Susan Meyer は *Jane Eyre* における imperialism について論じた論文で、労働者階級ではなく、governess という中産階級の女性が奴隷と結びつけられていると述べている (76)。この指摘は正しいであろうが、それが現実の奴隷制度に対する批判であったかどうかは疑問である。なぜならこれまで見たように、女性にとっての経済的自立や governess の地位などの社会的テーマはあくまで個人の問題として語られていて、社会問題として認識されてはいないからである。

governess を奴隷に例えているのは、Meyer も指摘しているように (76)、実は Rochester で、自分と結婚したら “governessing slavery” (303) はやめるのだろうと言っているが、Rochester や Jane が外国、特にヨーロッパ以外の国についてよくするような、半分冗談ともとれる言い方がされていて、これもまたあまり本気では受け取れない。ここで注目したいのは、この時点では Jane は結婚後も governess を続けると答えていることである。しかし Thornfield での party のあとで、Jane が Mrs. Fairfax の “choose your seat in any quiet nook you like” “just let Mr. Rochester see you are there and then slip away” (193) というアドバイスに従って “I retired to a window-seat, and taking a book from a table near” (194) と述べている。さらに “there was another entrance to the drawing room” (193) とも言っている。子どものころ居間に隣接した朝食室でカーテンの陰に隠れた Jane は、今度は governess

として、Rochesterや招待客とは違う出入り口を使って居間に忍び込み、窓際に座るのである。governessが階級的周縁に属することを示唆しているであろう。

こうして地理的、階級的、ジェンダーの上でも中心性を得たように見えるJaneであるが、*Villette*の結末はかなり異なっている。階級的、地理的そしてジェンダーの上でも周縁にあり、それが望ましいものではなかった点はLucyもJaneと同じである。つまり、女性で学校教師であり、イングランドから海を渡ってベルギーに行った。つまり外国人であり、Janeはほとんど行くことのなかった海の向こうの外国という点でも、周縁が示唆されている。ただ、問題の解決の方法は異なっている。さらに、ここで詳しく触れる余裕はないが、Lucyは宗教的にもカトリック教徒の中のプロテスタントであり、周縁に位置すると言えるが、これもまた*Jane Eyre*では前景化されなかった問題であると言える。

一言でいえば、*Jane Eyre*では、十九世紀イングランドの多くの女性が直面したけれど、Janeが考えずにすんだ問題をSt. Johnが考えているわけである。植民地がヴィクトリア朝の女性にとって、解放と新たな従属という二面性を持つというのはGikandiの指摘であるが(121-23)、St. Johnがこの問題に直面している。つまり、仕事か家庭か悩むのも、悩んだ末に実際に植民地に行くのもSt. Johnであるのだが、Janeはおじの遺産でgovernessとして働かなくてもいい身分となる。

それでは*Villette*においてLucyの周縁化はどのように解決され、あるいは解決されずにいるであろうか。まず男性との関係、特に力関係を見ると、しばしば引用されるように、Lucyの勤務先の学校での劇の際の(半)男装の場面が例にあげられる。男性役の代役として舞台に上がることになったLucyは、男女両方の服を身につける。つまり、“Retaining my woman’s garb without the slightest retrenchment, I merely assumed, in addition, a little vest, a collar, and cravat, and a paletôt of small dimensions” (209) ということである。

また、最後の場面での Lucy は、Paul Emanuel の運命をはっきりとは語らない。Paul の西インドからの帰還の予定とその船が嵐に遭ったことが語られた後、“Here pause: pause at once. There is enough said. Trouble no quiet, kind heart; leave sunny imagination hope Let them picture union and a happy succeeding life.” (596) という言葉に続いて、Paul 以外の何人かの登場人物のその後について語られ、小説は終わっている。さまざまな読み方をされるこの場面は、Ingham の指摘どおり、Paul の生死が Lucy の幸福と心の平安に何の関係もないことを示しているとすれば、Jane には達成できなかった、男性からの精神的自立を示していると言える。同様に舞台での男装の場面も、Ingham が考えるような (238) , 男女平等の問題についてのあいまいさではなく Lucy の明確な意志を示しているとも考えられる。あるいはこの時点では Jane のように男性との対等な関係、そして自立を模索していた Lucy が、Paul の不在の三年間に完全な精神的自立を達成したのだとも言える。そして Paul の事故死により、それは確認されたのである。*Jane Eyre* の結末で強調されているのは二人でいることの幸福であるが、*Villette* の結末はそうなっていない。

改めて、二つの作品で周縁性をめぐる問題はどのように描かれ、解決され、あるいは解決されずにいるであろうか。地理的、そして階級的な点から言うと、Lucy が最後にどこにいるのかは不明であるが、Paul 亡き後、遺産となった学校の経営者兼教師、ということである。*Jane Eyre* の結末において、周縁性は完全には消えることはないが、Jane が地理的、階級的には中心性を獲得し、男性との関係においても経済的には対等になったように見える。これに対し *Villette* の結末では Lucy の階級的、地理的位置が明らかにされていないのは、たとえ周縁であつても、Lucy がその周縁性を受け入れ、あるいは少なくとも望ましくないとは思っていないということではないか。最初は望んでそうなったわけではないかもしれない、つまり companion として仕えていた女性が亡くなったため、Bretton を離れて知り合いのいない Villette に渡った Lucy であるが、そしてそこでは、例えば宗教

的にカトリックの中でのプロテスタントであるなど、周縁性が示されている。そして Paul の事故死もまた望んだ結果ではないとしても、既に見たように、男性に対してはおそらく精神的に対等な関係を得たということである。

Jane と同じように、Lucy もまた植民地に赴くことなく植民地の富を得て、経済的な自立を達成する。それを Lucy や Jane、あるいは Brontë がどの程度意識していたか、あるいは批判的であったかはわからない。植民地は女性に力を与える場なのか、奪う場なのか、どちらなのだろうか。植民地は Lucy にも Jane にも経済力を与えたし、Terry Eagleton が考えるように、インドに行ったあと、St. John に象徴される脅威が無力化されたとしたら (28)、そしてまた死が究極の無力化であるとすれば、植民地は二つの作品で男性を無力化することで相対的に女性に力を与えていることになる。もちろん結果的に植民地に渡ったために命を落とすことになった Paul や St. John にとって、植民地は力を奪われる場所であったし、Rochester にとっても植民地の西インドは、Bertha との結婚を強いられた呪われた場所であった。植民地はいわば、ハッピーエンディングでないおとぎ話の舞台でもあったわけであるが、前に触れたように二つの作品で植民地に関する具体的な記述が、イングランドやその他のヨーロッパについての記述にくらべて乏しいにも関わらず、作品が植民地の光と影を反映しているのは興味深いことである。

ではジェンダーについての周縁性の問題はどうかであろうか。再び Spivak の家族を中心にした *Jane Eyre* 論に戻ると、*Thornfield* での合法的家族は Bertha と Rochester であると言っている。そのとおりであるが、そうすると Jane が Rochester の mistress になることを断ったのは、当時の道徳的基準に従ったというだけでなく、非合法性による周縁性および不平等な力関係を Jane が嫌ったからであるとも言える。

また、女性であることがジェンダーの上で周縁性を意味するとすれば、その解決策は何であろうか。St. John の両性具有性にその鍵があると思わ

れる。*Villette* で Lucy に表される両性具有性が *Jane Eyre* では男性である St. John、そして Rochester に表象される。二人とも Jane を自分の意志に従わせようとする点で男性的であると言えるが、男性ではあるが長男でない、つまり相続権がない Rochester はある意味で女性にも近いと言えるが、好きな女性との結婚か仕事か、あるいは植民地に行くべきか悩む St. John は、女性の姿をより多く反映していると言える。先ほど触れたように、Rochester との関係に置いて最後はむしろ精神的に依存しているようにも思える Jane より、愛する女性との結婚ではなく仕事を選ぶ St. John は、禁欲的なだけでも、また批判されるだけの存在でもないはずである。先ほど見た植民地が女性にとって二重の意味を持つという Gikandi の指摘は、*Jane Eyre* と *Villette* にも当てはまると言える。ただその二面性が、男性にも表象されるのが Charlotte の作品の特徴だと言えるだろう（この点を sexuality の点から論じたのが Showalter の論文である。つまり Jane の二面性は Helen 対 Bertha の他、St. John 対 Rochester としても表されるということである。pp. 113–26 参照）。つまり先ほど見たように、男性登場人物の運命に植民地に対する不安が表れていて、一方女性はそうと意識せずに植民地の富で経済的自立を達成する。しかし *Villette* の場合は、Lucy は自分の中に女性であることのさまざまな問題を抱えて、最後まで一人で生きていることが示唆されているのであり、学校での演劇での男装はその象徴でもある。そして *Jane Eyre* では周縁性を表象する St. John が植民地で死に、*Villette* では一人で生き残った Lucy が周縁性を抱えたまま生きるのである。

二十世紀後半以降の映像化作品は、周縁性をめぐる問題を思い起こさせる。例えば、正木恒二は colonialism について論じた *Jane Eyre* 論の中で、フランコ・ゼフィレリ監督の映画 (1996) においてはインドについての問題はほとんど描かれず、St. John は遺産相続を執行する事務員のように描かれる、と指摘している (91)。もちろん St. John にはそういう側面もあるのだが、作品としての映画と原作の差異、そして映画間での差異は何を意味するのか。時間の制約はもちろん理由の一つではあろう。正木は、映画

がインドを消去したことにより、逆にインドが果たす役割を思い起こさせることになる」と述べている (92)。監督その他の映画製作者がそこまで意図していたかは不明だが、ゼフィレリ版の映画にはほとんど現れなかったインド、そして Jane と St. John との関係を考えるのは重要なことである。

他にも、映画や舞台などの視覚芸術が、周縁の人々や周縁性の問題、例えば身体障害をどう描いているか、というのは、大変興味深い問題であるが (川崎 p. 36 参照。先ほど引用した周縁についての定義の中で、犯罪者、黒人、女性などが、「伝統的な歴史から排除された」人々に入っているのだが、障害者もここに含まれると考えてよいのではないか [Childers and Hentzi 252])、ここでは山本史郎の *Jane Eyre* およびその映画化の解釈、さらに 2011 年のキャリー・フクナガ監督の映画を題材に *Jane Eyre* における周縁性をめぐる問題を検討したい。山本もゼフィレリ監督の映画の英語版を題材に (日本語版とはかなり違う部分もある、ということも指摘している)、映画、原作ともクライマックスとなる場面、すなわち Jane が St. John のプロポーズを承諾しかけた瞬間に Rochester の声を聴いて Thornfield に戻る決心をするという場面を取り上げている。原作で終始自分の意志で行動する女性として描かれる Jane が、なぜここで自分の意志でなく、Rochester の不思議な声で Thornfield に戻った (ように見える) のか、という問題を提示している。Brontë も、Jane も、愛さえあれば正式な結婚という形式など必要ないと思っているはずなのに、そうは言わずに、ここで自分の意志でなく、Rochester の声を聞いて Thornfield に戻る決断をしたのは、Brontë が社会の要求に配慮したから、というのが、この場面についての山本の見解である (179–80)。そしてゼフィレリ版の英語版では、この Rochester の声が全く表れないということを指摘した上で、この部分の描き方がゼフィレリ監督の解釈である、つまり、Jane が自分自身の判断で戻ったというのが監督の作品の読み方であり、監督が Jane の判断を肯定していることは観客にも伝わるはず、と説明している。

原作の映像化への関心と、映画と原作、そして複数の映画の違いに現れ

る違いを通して文学作品とその解釈を論じている点は、F. B. Pinion の Appendix や、Patsy Stoneman が *Jane Eyre* や *Wuthering Heights* に対して行った、また Ingham が最終章で試みた研究に共通する興味深い姿勢である。ただし結論の妥当性となるとどうであろうか。Jane が結婚による結びつきを重視したのは、最初に見た Spivak の指摘とも一致する。先ほども述べたように正式な結婚ではない限り日陰の身であり、周縁性を示唆するものであることは、Rochester の mistress としての生活を “to be a slave in a fool’s paradise” (402) と呼んでいることからもうかがえる。Rochester の声は Jane 自身の心の声だったのではないか。また既述のとおり、実際に十九世紀のイングランドで中産階級の女性が直面したさまざまな問題は St. John に託され、Jane 自身は直面することはなかったのであるとすれば、自分の困難を個人の問題として認識する Jane が、そして Brontë がそれほど社会の要求にプレッシャーを感じる必要はないはずである。さらに、Woolf が “an awkward break” (63) と批判している点ではあるが、Jane にとって女性の自立という現実社会のテーマと、超自然(的に思える)現象とは、矛盾するものではないのだ。Woolf が批判したのは、しばしば引用される “It is thoughtless to condemn them [women], or laugh at them, if they seek to do or learn more than custom has pronounced necessary for their sex” という Jane の言葉とそれに続く “When thus alone, I not unfrequently heard Grace Poole’s laugh” (126) という部分であるが、Jane にとっては、Grace Poole の笑い声は女性の社会状況と同じくらい、あるいはそれ以上に切実な問題であったのかもしれない。(もし、Jane にとって社会の問題がいちばんの関心であったなら、Sr. John がインドに行く前、恋人である Rosamond Oliver の父親の資金で行ったように、遺産として相続した二万ポンドで学校を建てるとか、あるいはいとこの Rivers きょうだいと分けた後の五千ポンドでもそういうことはできたと思えるが、小説はそうなっていない。そして Jane にとって目の前の超自然的現象が現実であるならば、現実の社会問題、特に植民地の問題はむしろ、非現実の、おとぎ話の世界に属するものでは

ないだろうか。)

最後に触れておきたいのは 2011 年のキャリー・フクナガ監督の映画では、Rochester の声を Jane が聞く場面も再現されている。この映画の特徴は、それまでの映画があまり描いてこなかった Moor House 以降の場面が詳しく描かれていることである(芦澤 115-16)。二十一世紀の十年代に入ってから公開されたこの映画は、原作に忠実でありつつも新しい解釈の下に作られている、と言えるのではないか。インドに着いての描写がほとんどない点ではこれまでの映画と(あるいは原作とも)変わらないのであるが、これまで省略されてきた場面も忠実に再現し、かつ原作では時間にそって語られる物語が、Jane が Moor House でいとこたちに助けられる場面から映画が始まり、物語は Jane の回想という形で進む。何より現在では、Jane が自分の意志で Rochester の元に戻ったことは、Rochester の不思議な声とも矛盾しないということも示しているようである。

ヒロインたちが直面したのはほとんどすべて周縁性をめぐる問題であり、本論ではそれらの問題の描き方及び映像化作品との違いを考察してきた。周縁性をめぐる問題は映画とそれをめぐる解釈にも影響を与えたのである。十九世紀のイングランドで中産階級の女性に許された職業が限られていたから、経済的自立のためには植民地の富が必要であった。Jane は最後には governess という階級的周縁ではなく、働かない既婚女性という本物の中産階級の身分となり、同時に男性に経済的に支配されることはない。それを可能にしたのは、植民地の富であった。Lucy は教職を続けるが、やはり植民地の富は経済的自立のためには必要であった。つまり、自分が経営している学校は Paul からの贈り物であり、西インドからの帰りに遭難した(らしい) Paul の財産、言い換えれば植民地の富であったわけである。Brontë がどの程度意識していたかは不明であるが、ジェンダー、植民地、そして階級の問題が互いに関係していることは作品で示されているし、周縁性がヒロインの周りから消えることはあっても、作品世界から消えることはなく、その点が映像化された作品とは違っている。Ingham の指摘通り(116)、

さまざまな問題について、一面的に、あるいは単純化せず、描き切ったことは間違いない。Lucy や Jane が直面した問題は、十九世紀のイングランドが抱えていた問題でもあった。Brontë はヒロインたちを通して、そして作品を通して周縁性を見つめ、社会と向き合い、ヒロインの困難を解決しようと試みたのである。ただし、Brontë も彼女のヒロインたちも、彼女たちが直面する問題を社会問題としてよりも個人の問題として認識しているし、明確な社会批判という意識はなかったようである。ここで詳しく述べることはできなかったが、結末での Rochester の身体障害や、Jane のジェンダーにおける周縁性などは、二十一世紀の映像作品においてもさまざまな問題を提起している。その意味で今後ますます研究が進む分野となるであろう。

Works Cited

- 芦澤久江「映画になった『ジェーン・エア』」『ジェーン・エアの作者ってどんな人?: シャーロット・ブロンテの素顔』第12章 中岡洋著 東京: 彩流社、2012. 111–117. Print.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Ed. Michael Mason. Harmondsworth: Penguin, 1996. Print.
- . Ed. Margaret Smith. *The Letters of Charlotte Brontë: With a selection of letters by family and friends*. Vol. III. 1852–1855. Oxford: Clarendon, 2004. Print.
- . *Villette*. Ed. Mark Lily. Harmondsworth: Penguin, 1985. Print.
- Childers, Joseph and Gary Hentzi, ed. 杉野健太郎、中村裕英、丸山修訳『コロンビア大学文学・文化批評用語辞典』第3版 東京: 松柏社、2002. Print.
- Eagleton, Terry. *Myths of Power: A Marxist Study of the Brontës*. Anniversary Edition. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2005. Print.
- Gikandi, Simon. *Maps of Englishness: Writing Identity in the Culture of Colonialism*. New York: Columbia UP, 1996. Print.
- Helsing, Elizabeth. *Rural Scenes and National Representation: Britain, 1815–1850*. Princeton: Princeton UP, 1997. Print.
- Ingham, Patricia. 白井義昭訳『ブロンテ姉妹』東京: 彩流社、2010. Print.
- 川崎明子書評 *The Madwoman and the Blindman: Jane Eyre, Discourse and Disability*. David Bolt, Julia Miele Rodas, Elizabeth J. Donaldson, eds. 『ブロンテスタディーズ』第5巻6号(2014): 31–37. Print.
- 正木恒二「イギリスの主体とインド的他者」『多文化主義で読む英米文学——新しい

- イズムによる文学の理解』木下卓・笹田直人・外岡尚美編著 京都：ミネルヴァ書房、1999. 90–106. Print.
- Meyer, Susan. *Imperialism at Home: Race and Victorian Woman's Fiction*. Ithaca. Cornell UP, 1996. Print.
- Pinion, F. B. *A Brontë Companion: Literary Assessment, Background, and Reference*. London: Macmillan, 1975. Print.
- Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing*. Expanded Edition. Princeton: Princeton UP, 1999. Print.
- Spivak, Gayatri. *The Critique of Postcolonial Reason: Towards a History of the Vanishing Present*. Cambridge: Harvard UP, 1999. Print.
- Stoneman, Patsy. *Brontë Transformations: Cultural Dimension of Jane Eyre and Wuthering Heights*. London: Prentice Hall, 1996. Print.
- Sutherland, John. *Can Jane Eyre Be Happy? More Puzzles in Classic Fiction*. Oxford. Oxford UP, 1997. Print.
- Woolf, Virginia. *The Essays of Virginia Woolf*. Vol. IV. 1925–1928. Ed. Andrew McNeillie. London: Hogarth Press, 1994. Print.
- . *A Room of One's Own and Three Guineas*. Ed. Michèle Barrett. Harmondsworth: Penguin, 1993. Print.
- 山本史郎『東大の教室で「赤毛のアン」を読む——英文学を遊ぶ9章＋授業のあとのおまけつき』東京：東京大学出版会、2014. Print.